

災害感染症セッションを企画しました（2015/3/16）

テーマ：災害関連感染症についての発表
場所：東北大学川内北キャンパス B102

3月16日(月)、当研究所の服部俊夫教授（災害医学研究部門 災害感染症学分野）が第3回国連世界防災会議のパブリックフォーラムとして災害関連感染症の専門家による特別なセッション「Medical and Public Health Preparedness for Large Scale Disaster」を主催しました。最初に災害感染症学分野の浩日勒助教が災害感染症についてのWHOの分類を紹介し、また共同研究を続けるフィリピンの主たる疾患は災害感染症の範疇にはいることを提言し、中でも Dengue 熱において、Galectin-9 が病態を反映する新しいマーカーであることを力説しました。ハワイ大学の Lishomwa Ndhlovu 助教は世界の HIV 感染の状況について概説し、また札幌医大の鷺見綾子准教授は中国のウーハンにおける結核発症に関して、季節変動があることを明らかにしました。季節変動の中の気象学的データの何が影響しているかについてはまだ明らかではなく、ハルピンなど他の地域でも解析を続けていると述べました。最後に静岡県立総合病院の袴田康弘総合診療部長が、将来東南海地震に襲われる可能性の高い静岡県の災害感染症対策について述べ、災害拠点病院を中心に、災害に関するアンケート調査も行い、その意識がいまだに十分でなく、今後のセミナーや教育活動が大事であると話しました。



講演会の様子（左上：浩日勒助教、右上：鷺見准教授、
左下：Lishomwa 助教、右下：袴田総合診療部長）

文責：服部俊夫、浩日勒（災害医学研究部門）